

ケンジと ワールドカップの夢



この本について

Ten-year-old Kenji watches in awe as Japan's national team stuns the world at the 2026 FIFA World Cup, playing like true dark horses beyond anyone's expectations. Inspired by their courage and teamwork, Kenji rallies his Osaka neighborhood friends to form their own scrappy football squad — convinced that heart matters more than size. Together they discover that the biggest dreams always begin with a single kick.





ユウト



ミオ



ソラ



ハル

テレビの向こうの青い炎

テレビの向こうの青い炎

六月の夜、ケンジは大阪の家のリビングで、テレビの前にきちんと正座していた。画面には二〇二六年ワールドカップ、日本対ブラジルの大きな試合。青いユニフォームが広いピッチを走るたび、ケンジの目も右へ左へ忙しく動いた。テーブルの上の麦茶はもうぬるくなっていたのに、ひと口飲むことさえ忘れるくらい、心は試合の中に飛びこんでいた。

相手は世界でも有名な強いチームなのに、日本の選手たちはちっとも小さく見えなかった。すばやく守って、すばやくつないで、だれかがぬかれても、すぐに別のだれかが走って助ける。その動きが重なるたび、ケンジの胸はどくんどくと大きく鳴った。上手いだけじゃない。こわくても前へ出る勇気と、仲間を信じる気持ちが、画面の向こうからまっすぐ伝わってきた。

後半、ブラジルの強いシュートを体を投げ出して止めた場面で、ケンジは思わず立ち上がった。すぐに日本は前へ運び、短いパスをつないでゴール前までたどり着く。結果がどうであれ、その戦いぶりは世界を驚かせるほど堂々としていて、ケンジには空がひらけるみたいに見えた。負けない気持ちは、体の大きさよりずっと大きいのだと、目で見てわかった。

試合が終わっても、ケンジの胸の熱は消えなかった。テレビが静かになったあとも、ソファの横にあった自分のボールを両手で持ちあげ、そっとひざにのせた。明日、ぼくもはじめたい。すごいスタジアムじゃなくていい。仲間がいて、一つのボールがあればいい。そう思うと眠るのがもったいなくて、布団に入ってから、青いユニフォームの走る姿が何度もまぶたの裏をかけぬけた。



大阪キッズFC、はじまる

大阪キッズFC、はじまる

次の日の朝、ケンジは目ざましが鳴る前に飛び起きた。顔を洗っても、パンをかじっても、頭の中には昨夜の試合の音が残っている。日本の選手たちみたいに走るには、まず仲間がいる。そう考えたケンジは、ボールをわきにかかえると、家を出て近所の友だちを集めに走り出した。足どりは軽く、いつもの道まで何か新しい道に見えた。

最初に声をかけたのはユウトだった。つぎにミオ、そして公園の近くでソラとハルにも会った。ケンジは息をはずませながら、「チームを作ろう」と言った。いきなりすぎて、みんなは目を丸くした。ユウトは「いまから？」と笑い、ミオは「どこでやるの」と首をかしげた。でもケンジの声は止まらない。昨夜見た戦いが、まだ胸の中で走りつづけていたからだ。

「強い相手でも、心がそろえば戦えるんやで。ぼくら、小さくてもいける。名前も決めよう。大阪キッズFC！」ケンジがそう言うと、ハルが先に声をあげて笑った。「なんかかっこいい！」ユウトもすぐに乗ってきて、胸をどんとたたいた。ミオは少し考えてから、やわらかくうなずいた。「ちゃんと続けるなら、わたしもやる」その一言で、空気がぱっと明るくなった。

どこで練習するか話し合っ、みんなは廃校になった学校の校庭を思い出した。草は伸びているけれど、走る場所はある。ゴールはなくても、工夫すればいい。ケンジはその考えだけでわくわくして、胸がまた熱くなった。帰る前、五人は輪になって、小さく手を重ねた。まだユニフォームも作戦もない。でも、そこにはたしかに最初のキックの前の、ぴんと張った夢の音があった。



おはよう!

おはよう、
ケンジ!

ぼくらの校庭をさがして

ぼくらの校庭をさがして

放課後、ケンジたちは廃校の校庭へ向かった。門は開いていたけれど、人の声はなく、風が草をゆらす音ばかりが聞こえた。白線はもうほとんど消え、すみの方には落ち葉がたまっている。それでもケンジには、その場所がさびしくは見えなかった。まだ何もないからこそ、ここからなら何だって始められる。そんなふうに思える、広い余白みたいな場所だった。

ユウトはさっそく枝をどけ、ハルは小さな石を集めて端へ運んだ。ミオは地面のでこぼこを見つけて、「ここで転びそう」と教えてくれる。ソラは古いベンチをまっすぐに直して、荷物置き場にしようと言った。だれかに言われたわけでもないのに、みんなの手が自然に動き出す。ケンジはその様子を見て、チームってこういうことかもしれないと、まだ言葉にならない気持ちを胸の中でつかんだ。

ひとつおりの片づけると、ケンジはボールを地面に置いた。最初のキックは思ったよりも大きくはずみ、草の上で少し変な曲がり方をした。それがかえっておもしろくて、みんなは笑いながら追いかけた。ユウトは速く走りすぎてボールを追いこし、ハルは足を空ぶってしりもちをついた。ミオはていねいに止めようとして、土ぼこりをふわりと立てた。笑い声が静かな校庭をゆっくり起こしていった。

日がかたむくころ、風のおいまで少し変わったように感じられた。さっきまで空っぽに見えた校庭が、いまは自分たちの気配で満ちている。ケンジはゴールのない端から端までを見わたし、小さくうなずいた。「ここ、ええやん。ぼくらの場所や」だれも反対しなかった。古い校庭は、その日からただの空き地ではなく、大阪キッズFCの最初のホームになった。



うまくいかないパス

うまくいかないパス

チームの形を決めようとしても、最初は何もかもがふわふわしていた。前はだれ、後ろはだれ、ゴールを守るのはだれ。ユウトは「いっぱい点を取りたい」と言い、ソラは「じゃあ守る」とすぐ決めた。ハルはどこでも走ると言って胸を張り、ミオは「空いてる場所をつなぐ役がいい」と静かに答えた。ケンジはうれしくなって、みんなの前で少しだけキャプテンの顔をした。

けれど、いざパスの練習を始めると、思ったようにはまったく進まない。強すぎて相手の足を通りすぎたり、弱すぎて途中で止まったり、狙った方向とぜんぜんちがう方へ転がったりする。ケンジも「もっとこっち」「そこで止めて」と口を出すのに、自分のパスは草に引っかかってしまう。うまいイメージだけが先に走り、足はまだその速さについていけなかった。

何度目かの失敗のあと、ミオがボールを拾いながら言った。「急がんでもいいよ。ちゃんと見て出せたら、つながるから」その声は小さかったけれど、不思議とみんなの耳にまっすぐ届いた。ユウトも照れくさそうに頭をかき、ハルは「じゃあ、呼んでから出す！」と元気に言いなおした。ケンジは自分が少しあせりすぎていたことに気づき、深く息を吸った。

それからは、パスを出す前に名前を呼ぶことにした。「ユウト！」「ミオ！」「ソラ！」名前が飛ぶたびに、ボールの道も少しずつはつきりしていく。まだミスは多い。それでも、さっきまでばらばらだった足音が、すこしだけ同じリズムになってきた。練習の終わりに五人で円になり、「大阪キッズFC！」と声を合わせると、校庭の古い空気までうれしそうにふるえた。



ゴールは手づくりで

ゴールは手づくりで

次の練習で、ケンジたちはすぐに困った。走ることはできる。パスもできる。でも、ちゃんとねらうゴールがない。校庭の端に石を二つ置けば目印にはなるけれど、それだけでは何だかさびしい。ユウトは「ゴールがあったら、もっとシュートしたくなるのに」と言い、ハルも大きくなすいた。ケンジは少し考えてから、手でひざをぱんと打った。「作ろう。ないなら、作ればええやん」

みんなは家から使えそうなものを持ち寄った。長いひも、チョーク、古いペットボトル、段ボール。ソラがひもを結んで枠のしるしを作り、ミオが地面にまっすぐ線を引く。ハルは段ボールに大きく「GOAL」と書き、ユウトは空のペットボトルを並べて目立つようにした。ぴかぴかの道具じゃない。でも、一つずつ置かれるたびに、ただの空き地がちゃんと試合のできる場所へ変わっていくのが見えた。

できあがった手づくりゴールに向かって、最初のシュートを打ったのはケンジだった。ボールは少し上に浮いて、ひものすぐ上を通りすぎた。みんなが「あーっ」と声をそろえ、ケンジは耳まで赤くなった。次はユウトが強く打ちすぎて外し、その次はミオがやさしくかけてきれいに真ん中を通した。ハルは飛び上がって喜び、ソラは「いまのええやん」と拍手した。たった一本のひもでも、そこに夢中になる理由は十分だった。

練習の終わり、風にゆれるひもを見ながら、ケンジは胸の中で昨夜の日本代表を思い出した。すごいスタジアムじゃなくても、最初の一歩は同じかもしれない。だれかと力を出し合って、ないものを工夫して、できる形にする。それも立派なチームの仕事だ。大阪キッ



ズFCのゴールは手づくりだったけれど、その向こうに見える夢だけは、どこまでも大きかった。

ひとりで走りすぎた日

ひとりで走りすぎた日

何日か練習を重ねるうちに、ケンジの中で別の気持ちが大きくなってきた。もっと目立ちたい。もっとすごいプレーをしたい。日本代表の映像を見返すたび、速いドリブルやかっこいい切り返しが頭に残る。ある日、ケンジはボールを持つたびに一人で前へ前へ進もうとした。ぬいて、またぬいて、そのままシュートまで行けたら最高だと、本気で思っていた。

最初のうちは、みんなも「おお」と声をあげた。けれど、草の多い校庭ではボールが思わぬところで止まり、相手役のユウトに足を出される。ミオが横で手をあげていても、ケンジは見ない。ハルが前へ走っていても、出さない。もう少し、あと少しで行けるはずだと信じるたびに、ボールだけが足元からこぼれていった。何度も続くうちに、だれの口数も減っていった。

休けいするとき、ユウトが水筒を持ったまま言った。「ケンジ、いまの、ずっと一人やったで」声は強くなかったけれど、まっすぐだった。ミオも困ったように笑って、「パスくれたら、もっと前に行けたかも」とつぶやく。ケンジはすぐに言い返せなかった。自分ではチームを引っばっているつもりだったのに、もしかすると、みんなを置いていっていたのかもしれない。その考えが、のどのあたりで重く止まった。

練習の終わり、ケンジは一人でボールを拾いながら、昨夜の試合を思い出した。日本の選手たちは、だれも一人で全部やろうとしていなかった。走る人、支える人、受ける人、守る人。みんながいるから前へ進めていたのだ。ケンジは夕焼けの校庭でボールを抱え、少しだけはずかしくなった。かっこよさは、一人で目立つことだけじ



やない。そのことが、ようやく胸に入りはじめていた。

けんかのあとにくる静けさ

けんかのあとにくる静けさ

次の練習では、前の日のもやもやが残っていた。ケンジは意識してパスを出そうとしたけれど、変にかたくなってしまい、タイミングがずれた。ユウトは走りこんだのにボールが来なくて、「いまやろ！」と大きな声を出した。ケンジもすぐに「わかってるって！」と言い返す。たったそれだけの言葉なのに、空気は急にぴんと張り、さっきまでの夕方の風まで止まったみたいになった。

そのあとのミニゲームは、もっとひどかった。声をかけても、どこかとげとげしい。ボールが外へ出たあとも、だれもすぐには取りに行かない。ハルは困った顔で二人を見くらべ、ミオは何か言いかけてやめた。とうとうソラがゴール前から歩いてきて、止まったボールの横に立った。「このままやと、ボールまでしんどそうやで」そのひと言で、みんなの目がようやく下を向いた。

ベンチに座って、少し長い沈黙が流れた。ケンジは土のついたくつ先を見つめ、ユウトは水筒のふたをいじっていた。やがてミオが静かに言った。「勝ちたいのは、みんな同じやよ。でも、言い方でこわくなる」ハルも小さくうなずいた。ソラは「だれか一人が悪いんやなくて、あせってたんやと思う」と続けた。その言葉は、責めるより先に、ほどける道を見つけてくれる言葉だった。

ケンジは先に顔を上げた。「ごめん。ぼく、ちゃんと見えてへんかった」ユウトもすぐに肩をすくめて、「おれも言いすぎた。走ったらぜったい来るって思った」と答えた。そこでみんなが少し笑って、つまっていたものがようやく動いた。もう一度立ち上がるとき、ケンジは前よりも小さな声で「次、いこう」と言った。その声は前より強く聞こえた。やさしさが入っていたからだ。



雨の日の作戦会議

雨の日の作戦会議

その週の終わり、空は朝から灰色で、放課後にはしっかり雨が降り出した。校庭の練習はできない。けれど、だれも「今日はなし」とは言わなかった。ケンジの家の軒下に集まった五人は、ぬれたくつをそろえ、古い折りたたみテーブルを囲んだ。外では雨つぶが地面をたたいているのに、みんなの目の中には、まだ走りたい気持ちがちゃんと残っていた。

ケンジは家のテレビで、録画しておいた日本対ブラジルの試合を流した。大きなプレーだけでなく、ボールを持っていない選手の動きも見ようと、ミオが言ったからだ。みんなで画面をのぞきこむと、たしかに見えてきた。だれかが受ける前に、別のだれかが先に走って道を作っている。守るときも、一人が飛びこむ前に、後ろからちゃんと支えている。ケンジは「ほんまや」と何度もつぶやいた。

ソラはノートを開き、えんぴつで丸を五つ描いた。そこから矢印をのばして、「ここが動いたら、ここが助ける」と図にしていく。ハルはその横で、自分の役目に星印をつけて大よろこびした。ユウトは「走るだけやなくて、引きつけるのも仕事か」と目を丸くする。ミオは「ボールがないときの動きも、パスの半分やよ」と言った。その言葉は、ケンジの胸にするりと入って、しっかり残った。

雨がやむころには、テーブルの上の紙は矢印だらけになっていた。ケンジはノートを見つめながら、前よりもずっとわくわくしていた。すごい技を一つ決めることより、みんなで同じ絵を頭に持つこと。そのほうが、もっと強いかもしれない。雨の日の作戦会議は、走れない代わりに、チームの心を同じ方向へ走らせてくれた。外の空はまだくもっていたのに、五人の気持ちだけは明るく晴れていた。



つながる声、つながる足

つながる声、つながる足

次に晴れた日の校庭は、前より少し広く見えた。たぶん、五人の頭の中に同じ作戦の線が入ったからだろう。ケンジはボールを置き、「三本パスをつないでから前へ行くで」と声をかけた。ユウトは外へ広がり、ミオは少し後ろに残り、ハルはその間を元気に動く。ソラもゴール前から大きな声で場所を知らせる。はじまる前から、前よりずっとチームらしかった。

最初の数本はまだぎこちなかったけれど、やがてボールは短く、でも気持ちよく転がりはじめた。ケンジからミオへ、ミオからハルへ、ハルから空いた場所へ走ったユウトへ。ユウトがクロス気味に返したボールを、ケンジは落ち着いて止めることができた。たったそれだけの流れなのに、みんなは大さわぎした。昨日まで難しかったことが、今日はほんの少しだけ本物になった気がしたのだ。

ソラの守りも光っていた。ユウトの強いシュートを手のひらで弾き、転がったボールにすぐ飛びつく。ハルは転んでもすぐ立ち上がって戻り、ミオは苦しいときほど近い味方を見つけた。ケンジは一人で決めることより、だれかがうまくいくように動くほうがずっと楽しい瞬間があると、体でわかってきた。いいプレーが出るたびに、「ナイス!」「いまのええ!」という声が、校庭じゅうを跳ねまわった。

その日の帰り道、古い校門を出るときにケンジは後ろをふり返った。草の上には自分たちの足あとが重なり、手づくりゴールのひもが夕方の風に揺れていた。はじめはただの空き地だった場所が、いまは笑い声と約束のしみこんだ特別な場所になっている。ケンジはボールを軽くつきながら思った。夢って、遠くにだけあるんじゃない



- 。こうして毎日、声をつないでいく足元にもちゃんと生まれるんだ
- 。

はじめての大会の知らせ

はじめての大会の知らせ

ある日の帰り道、商店街のはしにある掲示板の前で、ハルが大きな声をあげた。「見て！」そこには、近くの少年サッカー大会のお知らせが貼ってあった。小さなチームも参加できます、と書いてある。ケンジはその紙を見た瞬間、胸がどきとした。大会。テレビの向こうじゃない、本当に自分たちが出るかもしれない試合。うれしい気持ちと同じくらい、足元がくすぐったくなるような不安もわいてきた。

「でも、ぼくら、まだできたばかりやで」とユウトが言うと、ソラも静かにうなずいた。たしかに、ほかのチームはそろったユニフォームで、ちゃんとコーチもいるかもしれない。大阪キッズFCには、手づくりゴールと、少しずつ合ってきたパスしかない。それでもミオは掲示板を見つめたまま言った。「だからこそ、出てみたい。いまの自分たちを知れるから」その言葉で、ケンジの背中がすっとのびた。

申しこみを決めると、みんなは準備を始めた。おそろいのユニフォームはないので、家にある青いシャツをできるだけ集める。番号のかわりにガムテープで目印をつけ、ソラの手ぶくろは少し大きいものを借りた。ケンジの母も、洗ったシャツをたたみながら「楽しんでおいで」と笑ってくれた。そのひと言で、緊張していた心が少しやわらかくなった。

大会までの数日、練習には新しい意味が生まれた。あいさつの仕方、試合前の並び方、外へ出たボールをすぐに追うこと。ケンジはゴールを決める練習だけでなく、仲間を見る練習も前より大事にした。勝ちたい。でも、それだけじゃない。ちゃんと大阪キッズFCらし

少年サッカー大会 開催!



参加チーム募集中!

開催 5月25日(土)

開始 午前10時キックオフ!



Registration form with fields for name, address, and contact information.

Informational text block, possibly detailing tournament rules or location.

Informational text block, possibly detailing tournament rules or location.

Informational text block, possibly detailing tournament rules or location.



く戦いたい。そう思うほど、最初の日に手を重ねた小さな輪が、いまではずっと大きな約束になっている気がした。

大きな相手と小さな円陣

大きな相手と小さな円陣

大会の朝、空はまぶしいほど青かった。会場のグラウンドに着くと、ケンジたちは思わず立ち止まった。広い。白線はきれいで、ゴールにはちゃんとネットがある。まわりには人数の多いチームや、そろいのユニフォームを着た子たちがいて、どこを見ても自分たちより強そうに見えた。借りものの青いシャツを着た大阪キッズFCは、少しだけ小さく見えた。でも、ここまで来たというだけで、もう胸はいっぱいだった。

ユウトは相手チームの体つきを見て、「でかいなあ」と正直に言った。ハルはその言葉で少しだけ顔がかたくなる。ケンジだって緊張していた。手のひらは汗でぬれて、いつものボールタッチができるか不安だった。そんなとき、ミオが小さな声で「ケンジ、あの夜の試合、思い出して」と言った。日本がブラジルに向かっていったあの姿が、ケンジの中でふっとよみがえった。

試合前、五人は円になった。とても小さな円陣だったけれど、そこに入る顔はみんな真剣だった。ソラが「こわくても声出そう」と言い、ユウトが「走るのはまかせて」と笑う。ハルは「転んでも戻る」と言い、ミオは「近くを見る。ひとりにしない」と続けた。最後にケンジが言った。「勝つことだけ考えんでええ。ぼくらのサッカーしよう」その言葉で、肩の力がすっと抜けた。

笛が鳴ると、ボールは思っていたより速く動いた。相手の寄せも速い。それでも、大阪キッズFCはあわてて蹴り出すだけでは終わらなかった。名前を呼び、近い味方を探し、まず一つつなぐ。たったそれだけのことが、どれほど心を落ち着かせるか、五人はもう知っていた。大きな相手に向かう小さなチームの最初の一步が、グラウン



ドの上にしっかり刻まれた。

一点を取り返せ

一点を取り返せ

試合の前半、相手の勢いはやはり強かった。大阪キッズFCは守る時間が長くなり、ソラは何度も前へ出てボールを止めた。けれど、一度だけこぼれ球に反応が遅れ、先に押しこまれてしまう。先制点。相手チームの喜ぶ声が広がる中、ケンジは歯をくいしばった。胸の中で、負けたくない気持ちが急に大きくなる。でも前みたいに、一人で全部取り返そうとは思わなかった。

円陣のときの言葉を思い出しながら、ケンジはみんなに声をかけた。「まだいける。近く、近くでつなごう」ミオがすぐにうなずき、ユウトは深く息を吸って前を向いた。ハルは両ひざをぱんとたたいて、「よし！」と声を出す。再開すると、ケンジたちはあわてて前へけるのではなく、まず足元で落ち着かせた。短いパスを二本、三本。たったそれだけで、相手の速さが少しだけこわくなくなった。

そして後半の半ば、チャンスが来た。ミオが真ん中でボールを受け、すぐ横のケンジへ出す。ケンジは相手を一人引きつけてから、空いた右へ走ったユウトにそっと流した。ユウトの返したボールは少しだけ後ろだったけれど、ハルが全力で追いついて、つま先で前へ押し出す。最後にケンジが走りこみ、思いきりけた。ボールは低く転がってゴールのすみに入った。五人の声が一つになって空へ跳ねた。

試合はそのまま一対一で終わった。勝ちではない。でも、追いついた一点は、大阪キッズFCにとって大きな宝物だった。相手に先に取りられても、下を向かず、自分たちの形で取り返せたからだ。ベンチへ戻る途中、ソラが笑って言った。「あの一点、五人で取ったな」ケンジはうなずいた。ほんとうにそうだった。だれか一人のゴール



ではなく、みんなの気持ちが転がって入った一点だった。

最後のパス

最後のパス

大会の最後の試合は、さらに強い相手との対戦になった。相手は体も大きく、足も速く、前半の早い時間に一点を決めてきた。大阪キッズFCは追いかける形になったけれど、もう簡単にはくずれなかった。ソラが止め、ミオが落ち着かせ、ハルが何度も走り、ユウトが前へ引っぱる。ケンジも何度もボールを受け、前へ向いた。時間がすぎるほど、負けたくない思いは強くなっていった。

後半の終わりが近づいたころ、ケンジに大きなチャンスがきた。ミオのパスを受けたケンジの前には、相手の守りが一人だけ。左に切れれば自分で打てる。観客の声も、仲間の足音も、いっしゅん遠くなった。前のケンジなら、そのままシュートを選んでいたはずだ。けれど横を見ると、右のスペースへユウトが全力で走りこんでいた。昨夜の日本代表、雨の日のノート、みんなで重ねた声、一気に胸によみがえった。

ケンジは足の向きを変え、ぎりぎりまで引きつけてから、右へパスを出した。ボールはきれいにユウトの前へ転がる。ユウトは迷わず振りぬき、シュートはゴールに突きささった。同点。ベンチも、仲間も、見ていた人たちも大きくわいた。ケンジはユウトに飛びつきながら、なぜだか自分で決めたときよりもうれしかった。あの一本のパスに、いままでの全部がつまっている気がしたからだ。

けれど試合はそこで終わらなかった。残りわずかで相手に押しこまれ、最後にもう一点を許してしまう。笛が鳴いたとき、スコアは一对二。負けだった。ハルはくちびるをかみ、ソラは空を見上げ、ユウトはひざに手をついた。ケンジの胸にもくやしきは大きく広がった。それでも、さっきのパスの手ざわりだけは、消えずに残ってい



た。負けたのに、たしかにたどり着けたものが、そこにはあった。

勝ち負けの向こうがわ

勝ち負けの向こうがわ

試合のあと、ケンジたちはしばらくベンチで動けなかった。目の前では次の試合の準備が始まっているのに、自分たちだけ時間が止まったようだった。ハルの目には涙がたまり、ユウトは「くそー」と小さく何度も言った。ケンジも悔しかった。あと少しで届きそうだったからこそ、胸の中がひりひりした。でも、その悔しさの奥に、ふしぎとからっぽではない気持ちもあった。

やがて相手チームの子たちが近づいてきて、「最後のパス、すごかったな」と声をかけてくれた。ソラのセーブをほめる子もいた。ミオが少し驚いた顔を見ると、相手のキャプテンは笑って「またやろう」と言った。握手をかわすうちに、ケンジの中で固まっていたものが少しずつほどけていく。勝ったほうだけが、いい試合をしたわけじゃない。心を出し切ったら、そのことはちゃんと相手にも伝わるのだ。

帰り道、五人は大会でもらった参加賞の紙を大事そうに持っていた。派手なトロフィーはない。けれど、それぞれの足には、たしかに今日までの練習が残っていた。草だらけの校庭をそうじした日。手づくりゴールを作った日。けんかして、言い直して、雨の日にノートへ矢印を引いた日。ケンジは気づいた。自分たちが手に入れたのは、勝利じゃなくて、それを目ざして本気でつながれた時間だったのだ。

夕方、廃校の校庭へ少しだけ寄ると、いつもの風が迎えてくれた。手づくりゴールのひもは相変わらず少しゆがんでいたけれど、その姿がなんだか前より頼もしく見える。ケンジはボールを置き、仲間たちを見て言った。「また、やろう」みんなはすぐにうなずいた。



勝ち負けの向こうがわに残っていたのは、負けた悔しさだけではなかった。もっと練習したい、もっと一緒にうまくなりたいという、あたたかくて強い続きの気持ちだった。

夢はつづく、次のキックへ

夢はつづく、次のキックへ

大会が終わって数日後の夕方、ケンジたちはまた廃校の校庭に集まっていた。特別なことは何もない、いつもの練習の日だ。でも、みんなの目の光り方は少し変わっていた。大会の広いグラウンドを知ったからこそ、この校庭で積み重ねる一回一回がもっと大切に思える。ケンジはボールを足元で軽く転がしながら、ここがただの始まりの場所ではなく、これからも戻ってくる場所なのだと感じていた。

ハルが持ってきた木の板には、大きな字で「大阪キッズFC」と書かれていた。少し曲がった文字を見て、みんなが笑う。ユウトとソラが板をベンチの横に立てかけ、ミオは風で倒れないように石を置いた。立派な看板ではない。でも、それを見た瞬間、ケンジの胸はじんとあたたかくなった。名前だけだったチームが、思い出と約束を持つ本当の場所になった気がしたからだ。

練習が始まると、ボールはまた五人のあいだを行き来した。前より上手になったところもあれば、まだ失敗するところもある。ユウトは走りすぎて笑われ、ハルは転んで土だらけになり、ソラは難しいボールを止めて胸を張る。ミオのパスは相変わらずやさしく、ケンジは受ける前にまわりを見ることを忘れなかった。日本代表にあこがれて始まった夢は、いま、この校庭で友だちの声といっしょにちゃんと育っていた。

夕焼けが空をオレンジ色に染めるころ、ケンジはボールをそっと置いて、遠くを見た。いつか、もっと大きな場所でプレーしたい。日本代表みたいに、強い相手にも胸を張って立ち向かいたい。その気持ちはたしかにある。でも、いちばん大切なのは、夢が大きいこと



OSAKA KIDS FC
10

大阪
キッズFC

OSAKA KIDS
10

OSAKA KIDS
16

だけじゃない。夢をだれかといっしょにけり出せることだ。ケンジは仲間たちと笑い合い、もう一度ボールをけった。次のキックの先にも、きっと新しい夢が待っていた。



🇳🇴のPlyxが❤️を込めて制作



デジタル版およびオーディオ版をスキャンしてください